

技術情報

関係機関団体の長
各病害虫防除員 殿
農業資材販売等関係者

福岡県病害虫防除所長

大豆におけるダイズクキモグリバエの発生について

大豆に、ダイズクキモグリバエの被害が発生しています。本種の発生状況と発生生態をお知らせしますので、来年の防除対策の参考にして下さい。

-
- 1 作物名 大豆
 - 2 病害虫名 ダイズクキモグリバエ（門司植物防疫所で同定）
 - 3 発生が確認された地域
大牟田市、久留米市、柳川市、八女市、筑後市、大川市、行橋市、みやま市、大木町、
 - 4 ほ場における発生状況
被害は株単位で発生する場合もあるが、多くは集団で発生する（写真 1）。
葉は、大豆の成熟による黄変とは異なり、黒褐色に変色し、被害葉は多くが脱落する（写真 1）。
また、葉柄基部を中心に主茎にも幼虫が開けた直径約 2 ~ 3 mm の孔が見られるが（写真 2）。このような被害茎を中央部から裂くと、髓は食害されて空洞となり、多くは赤褐色に変色している（写真 3）。また、内部に幼虫や蛹が見られる場合もある（写真 3、4）。
以上のように、被害株は集団で発生することや葉が黒褐色に変色することから、ほ場の畦畔部からの観察によっても比較的容易に確認できる。ただし、大豆の成熟が進むと被害株と健全株との識別は容易でなく、前述の幼虫により開けられた孔や髓の食害での確認が必要となる。
 - 5 発生生態と大豆の被害
成虫は全体が黒色で、体長約 3 mm のハエである（写真 5）。九州では年 7 回発生するといわれており、卵はレンゲなどの葉裏に産み付けられる。ふ化幼虫は、主茎を経て根部に移動し、幼虫態で越冬する。成虫は 3 月末から出現し、レンゲなどに産卵する。7 ~ 8 月に現れる第 3 ~ 4 世代成虫が大豆に産卵し、大豆での被害が始まる。卵は大豆の若い小葉の中ろく付近の葉肉に 1 卵ずつ産み付けられる。ふ化した幼虫は表皮下を潜行して葉脈に達し、中ろく、葉柄を経て、主茎内に食入する。大豆への寄生は、早播きの夏大豆にはほとんど見られないが、5 月播き以降の夏大豆から寄生が見られ、7 月以降の秋大豆では、ほとんどが食入茎になるとされて

いる。また、7、8月における本種の卵期間は2.2日、幼虫期間は10.0日、蛹期間12.2日で、卵～成虫まで約24～25日、成虫の寿命は6～8日とされている。

これまでの報告によると本種の寄主植物は大豆、レンゲ、エンドウとされている。

大豆は生育初期に被害を受けると草丈が低く、節間がつまって着莢数が減少するなど、被害が大きくなる。本種は、本州（中南部）、四国、九州および東洋熱帯地方、オーストラリア、アフリカに広く分布する。

6 防除法

(1) 施肥を適正に行い、初期生育の促進を図る。

(2) 登録薬剤のマラソン粉剤（メカにより、登録内容が異なるので注意）を、初葉～本葉2枚展開期から1週間間隔で1～2回散布する。なお、大豆へのマラソン剤を含む剤の散布回数は3回以内であるので注意する。また、本葉が3～4枚展開期以降の散布はほとんど効果がないので防除時期が遅れないように注意する。



写真1 ほ場における被害株の発生状況



写真2 幼虫により開けられた茎部の孔



写真3 幼虫に食害された茎の内部と蛹

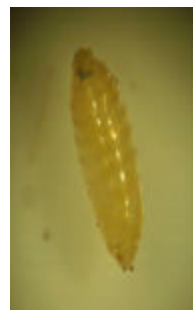


写真4 蛹



写真5 成虫